みやこ町歴史民俗博物館

博物館だより

MIYAKO TOWN DIGITAL MUSEUM
www.miyako-museum.jp

No.115

平成28年6月1日
みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667

博物館新展示・ここに注目！
小宮豊隆資料「漱石コレクション」Vol.2

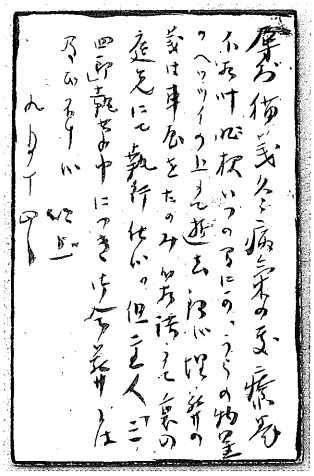
夏目漱石没後百年の今年、文豪ゆかりの事物は注目の的ですが、博物館所蔵の「小宮豊隆資料」もその一つです。漱石の愛弟子だった町出身のドイツ文学者・評論家が愛蔵した、漱石ゆかりの逸品をご紹介しましょう。

●漱石発「猫の死亡通知」

文豪・漱石の出世作「吾輩は猫である」は誰もが目に・耳にしたことのある傑作ですが、これのモデルとなる猫がいたことをご存知ですか？

明治37年7月のある日、夏目家の台所に居候を始めた黒猫がそれで、漱石はこの猫のおかげで神経症を克服、同時に猫の目から見た滑稽な人間観察を綴ったところこれが大ヒット。作家・漱石の道を決定づけました。

漱石にとって「恩人」でもある猫の死は、哀悼とユーモアをこめたこの葉書で、ごく親しい知人四名に知らされました。



▲黒く縁どられた葉書。下は翻刻文

辱知猫義久々病氣の處療養不相叶昨夜いつの間にかうらの物置のへツツイの上にて逝去致候　埋葬の義は車屋をたのみ箱詰にて裏の庭先にて執行仕候。但し主人「三四郎」執筆中につき御會葬には及び不申候　以上
九月十四日

博物館友の会で「楽習」しませんか？

博物館友の会は「故郷を楽しく学ぶ」をモットーに、見学会や各種イベントを行っています。関心のある方ならどなたでも参加いただけます。ぜひ入会を！

♪入会の方法
博物館窓口で登録・会費納入

♪年間会費
個人会員　3000円
家族会員　1名　2000円

♪お問い合わせ先
博物館　☎33-4666

6月の歴史講座

【漢詩紀行講座】
6月4日(土)　9時30分～

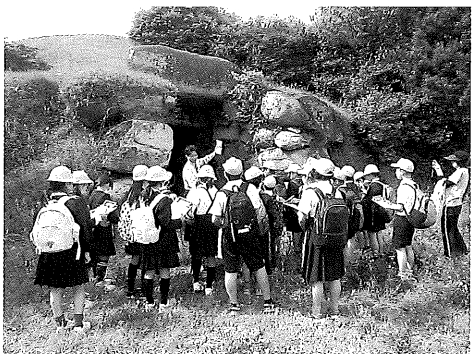
【古文書講座】
6月11日(土)　10時00分～

【古典かな講座】
6月18日(土)　9時30分～

【みやこ学講座】
6月25日(土)　10時00分～

※日程等変更となる場合があります。
※金曜古文書講座は、5月以降運営上の都合により休講となりましたのでご了承下さい。

4・5月の業務日誌から

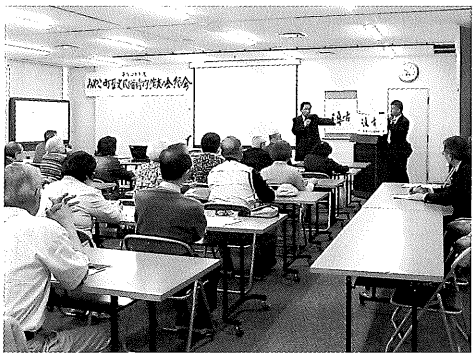


▲黒田小学校のシンボル「橘塚古墳」の前で

4月20日(水)、黒田小学校6年生が、町内の遺跡めぐりを行いました。通学路沿いに国・県指定などの重要な古墳が集中していることを知り、歴史の授業を身近に感じるきっかけになりました。

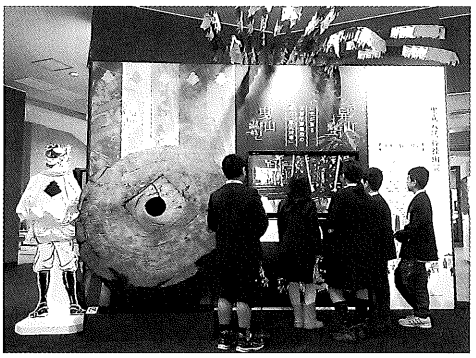
▲古代の「モノづくり」のワザを追体験しました

5月6日(金)、諫山小学校6年生を対象に「勾玉づくり」の出前授業を行いました。学芸員から勾玉の歴史や作り方を教わりながら、根気よく石を磨き、世界に1つだけの勾玉ができました。



▲リニューアル後はじめての定期総会となりました

5月10日(火)、柳瀬小学校6年生のみなさんが来館し、みやこ町の歴史を学びました。「生立八幡神宮神幸祭」の山笠資料紹介コーナーでは、皆さんが立ち止まってしまう場面も見られました。



▲身近な祭の映像資料に知り合いの姿を発見！

5月15日(日)、平成28年度の博物館友の会総会が開催されました。創立20年の節目の年だった前年度の成果を踏まえ、21年目の新スタートを切る本年度の事業計画等が承認されました。

みやこの歴史発見伝88

よみがえった弥生の机

―一八〇〇年前のモノづくりと技術―

ついに東九州自動車道が全線開通となり、大分、宮崎県へ短時間で往来できるようになりました。この道路を建設する際には路線上で多くの遺跡がみつかり、発掘調査が行われました。

みやこ町国作にある「国作八反田遺跡」もその一つで、調査の結果、弥生時代後期頃（約一八〇〇年前）につくられた大型の溝から大量の土器と共に様々な形の木製品が発見されました。また「銅戈」と呼ばれる武器の形をした祭の道具が、京築地域ではじめて出土しました。この溝は、その当時「魔除け」とされ、祭に欠かせない果物であった「桃」の種が大量に見つかっていることなどから、水に関わる祭や儀式が行われたと推測されます。

▲国作八反田遺跡「案」出土状況

弥生の机「案」

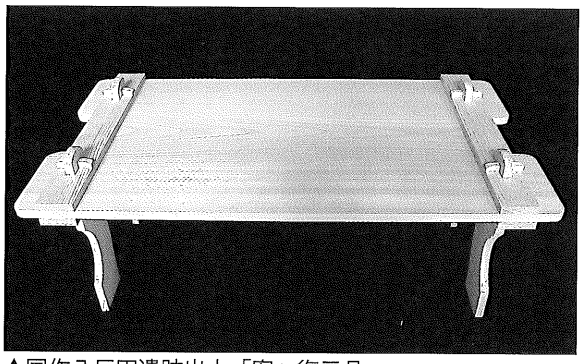
発見された様々な木製品の中で、特に注目を集めたものが、「案」と呼ばれる木製の机で、溝から二個体分が発見されました。天板の形に違いがみられますが、いずれも脚部を脱着する組み合わせ式の机で、「鼻栓」とよばれるクサビで固定する精巧な構造をみることができます。このうち一方の机には、無数の刃物傷が確認できることから「まな板」のように使われたものと推測されています。

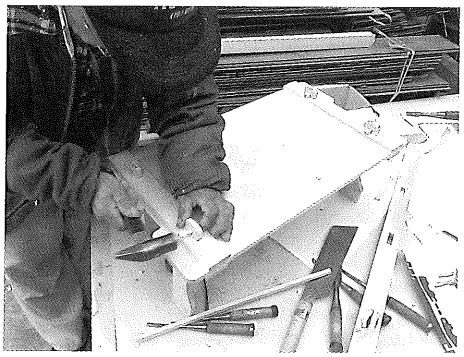
「案」は全国でも出土例が少なく、特に「張り出し」を備えたものは出土例が確認できません。今回の発見は、形の異なる「案」が同時に発見されたという点でも大変希少な事例といえます。

「案」の復元

遺跡から出土した遺物について、同じ物を復元・製作し、使用してみることで製作技術や機能を復元することを「実験考古学」と言います。今回、この手法を用いて国作八反田遺跡で発見された「案」を復元し、その構造を立体的に観察することを試みました。また単に形の復元だけではなく、完成にいたるまでの工程を復元し、その際に、どのような道具が必要であるかなどを明確にすることを目的に実施しました。

復元作業にあたり、出土した案から本来の大きさ、形の復元を試みると、本来の部材の厚さは約一cmであることが判明しました。ここまで薄い板材では温・湿度の影響を受け、「割れ」や「反り」が生じますが、実験の結果、机の両端脚部にある上下の板は、これを防ぐために設けられていることが確認できました。この他にも脚部の脱着実験の結果、板の「張り出し」は脚を固定する穴の「割れ」を防ぐための工夫であることなどが分かりました。また実際に製作してみると、薄い板に穴をあける時には鋭利な鉄製の鑿を様々な方向から使う必要があることや、脚部の曲線を削り出すには、ヤスリのような道具が不可欠であることなど、新たな発見がいくつもありました。この復元作業は町内在住の大工棟梁の協力を得ることにより実現しましたが、完成後、「現代の道具を駆使しても、薄い板に加工したり、その板に穴を開けたりするのは難しい。一八〇〇年も前にこの机が作られたこと自体がとても信じられない。また、たとえ道具があっても木の特性を知り尽くしていないとできない。」との感想をいただきました。

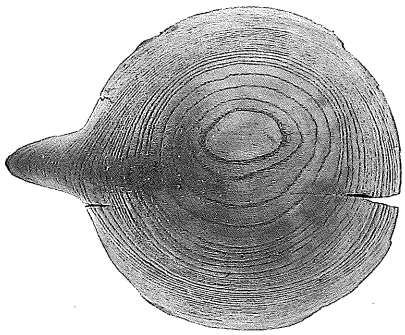

▲国作八反田遺跡出土「案」復元品


▲国作八反田遺跡出土「案」復元品製作状況

弥生時代の「モノづくり」

「国作八反田遺跡」の発掘調査結果や今回の実験などから、この机は特定の工房で専門の職人が製作した後に、この遺跡へ持ち込まれたものと思われます。また、この遺跡では、木製の柄杓が出土していますが、この柄杓も底の中央から木目が同心円状になるように計算されて削られており、独特の「美」意識を感じることができます。鉄の刃物がやっと普及し始めた頃に、このような精巧な木製品を作った当時の「モノづくり」の技術には敬服させられます。これらの木製品は、道具が進歩してもそれに比例して技術が進歩するとは限らないことを物語っているように感じます。

（井上信隆）


▲国作八反田遺跡出土木器「柄杓」底部